

教養コース ④ 国際社会学

混迷の中東を読み解く

第二回

# パレスチナ問題の 起源と現在

—講師 平井 文子 氏—

日 時	2020年9月5日（土）10:00～12:00
場 所	鶴瀬公民館 第三集会室
講 師	平井 文子 氏（アジア・アフリカ研究所員・元千葉大講師）
受講者数	24人

## 1. シオニズム運動

パレスチナ問題の起源は、今から130年ほど前にヨーロッパで起きたシオニズム運動にある。

シオニズムとは聖地エレサレムを意味する「シオンの丘」という言葉に由来し、シオニズム運動とはパレスチナの地にユダヤの国をつくる運動をさす。

シオニズム運動の発祥の原因は、ヨーロッパ社会の根深い反ユダヤ主義、ユダヤ人迫害にある。1897年フランスで起きたドレフュス事件があり、1897年に第1回世界シオニスト会議が開かれた。1948年に、中東進出を狙うイギリスの後押しでパレスチナにユダヤ人の国家、イスラエルができてしまった。

## 2. イギリスの中東戦略とシオニズム運動

クリミア半島の石油入手の目的のためにイギリスの「三枚舌外交」が展開された。①アラブには（フセイン・マクマホン条約1915～1916年）②ヨーロッパ向けにはアラブ



の分割・山分け（サイクス・ピコ協定1916年）③シオニストにはパレスチナにおける「民族郷土」設立支持（パルフォア宣言1917年）を約束した。

1947年には国連によってパレスチナをアラブ国家とユダヤ国家に分割する決議を採択したことにより、翌年には一方的にイスラエルが独立宣言。

根源はヨーロッパ諸国にあるのにユダヤ人迫害で、これに対して何ら責任のない中東のアラブ人が、先祖代々住み続けてきたパレスチナから追い出され暴力的に建国されたイスラエルを認めるわけにいなかった。（地図A，B参照）

パレスチナとイスラエルの戦いの根源的な問題はここにある。

### 3. アラブ諸国対イスラエルの戦争（中東戦争）

第1次中東戦争（1948～49年）アラブ諸国軍が破れ、国連の分割案を上回るパレスチナの7割以上を分捕る。70～100万人が難民となる。

第3次中東戦争（1967年）、東エルサレムとゴラン高原を占拠。第4次中東戦争（1973年）エジプトは自国領シナイ半島奪還のために奇襲、イスラエルに惨敗。アメリカの仲介で取り戻すことに成功。（地図C参照）

1978年エジプトはイスラエルと平和条約を締結。（地図D参照）

アメリカのユダヤ人の政治的な働きかけがあり、イスラエルの安全保障を担保。

### 4. パレスチナ人自身によるイスラエルとの戦い

パレスチナのアラブ人（以後パレスチナ人）は、それまで頼りにしていたエジプトの惨敗により、自ら主体となる解放運動を開始した。当初、ヤセル・アラファト議長率いるPLO（パレスチナ解放機構）を中心にゲリラ闘争によるパレスチナ解放を目指した

1982年、当時ベイルートにあったPLO本部は、イスラエルによる軍事攻撃で武装解除され、チュニスに撤退せざるを得なくなり、武力によるパレスチナ全土の解放路線を継続できなくなった。

イスラエルは占領地を常時イスラエル兵士の監視下に置き、パレスチナ人の人間としての尊厳を踏みにじり、自由な経済活動、自由な移動も許されなかった。

その後パレスチナ住民の大規模な反占領闘争がおこった。

第1次インティファダ（1987年）占領地青少年の小石の抵抗運動。

世界にイスラエルの非道な占領の実態を広く知らせ、アメリカに中東和平を推進させる1つの要因となった。他の要因に、湾岸戦争時のアメリカ中東政策の「ダブルスタンダード」に対する国際的な批判があった。



## 5. 中東和平プロセスの失敗と武力衝突

1993年「パレスチナ暫定自治政府協定」（オスロ合意）がいすらえる・パレスチナ間で結ばれ、「和平プロセス」と呼ばれる試みが始まった。

2000年、両者とも首都と主張するエレサレムの主権をめぐって、最終的にパレスチナ国家樹立について双方首脳の話し合いは合意に達することができなかった。

第2次インティファダ 圧倒的な武力の違いで劣勢に追い込まれたパレスチナは「貧者の武器」といわれる自爆攻撃（一般に「自爆テロ」と呼ばれる）で訴えるようになったが、それに対するイスラエルはアメリカから買い込んだ最新鋭の兵器で過剰なほど報復を加えた。

小型ミサイルを搭載したドローン攻撃によるパレスチナ人要人の暗殺も頻繁に行われている。実際、パレスチナはアメリカの武器製造会社にとって好都合な実験場になっている。

パレスチナでのイスラエルによる対第2次インティファダ作戦も反テロ戦争の一貫として扱われた。

## 6. イスラエルの占領政策の実態

2002年頃からイスラエルは、パレスチナ人のテロを防ぐためという理由で、入植地を占領地から切り離してイスラエム領内に組み込むために高さ8メートルもある分離壁を建て始めた。

パレスチナ人は生活道路分断され、身分証明書を提示しなければならない検問所が何か所もつくられ、移動の自由が大幅に制限され、いやがらせも多い。

イスラエルはヨルダン川西岸にユダヤ人のための町（入植地）を急速に拡大し、住宅を次々に新築して若い世代のユダヤ人家族をそこに移住させ、彼らの通勤のために入植地と本国を結ぶ高速道路を建設していった。（地図D参照）

一方、難民が多く住むガザ地区は人も物資も自由に出入りさせない封鎖状態に置き、2008年から2014年にかけてガザ地区に対する空爆を3回行った。

これにより抵抗運動をする幹部家族、近隣に狙いを絞って殺害し、ガザで唯一の発電所、病院、民間工場、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）の学校、空港、漁港を攻撃し、ガザの社会産業基盤全体を破壊しようとした。

約80年前に悲惨なホロコーストを味わったユダヤ人の子孫が、どうしてこのようなパレスチナいじめを行うのか？

ユダヤ教のラビで、カナダに住んでいるヤコブ・ラブキン氏によればイスラエル人の半数が、1967年アラブ領占領後に生まれ、占領を国際法違反とは感じず、施府やマスメディアの言い分を信じているからだそうだ。

## 7. エレサレム問題とは？

パレスチナ問題は主教対立ではなく、真の原因は土地を巡る対立である。土地や政治や経済の対立は、往々にして宗教対立や民族対立として現れることがよくある。エレサレムという町は、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム夫々にとっての聖地になっている。

ユダヤ教の「嘆きの壁」

キリスト教の「聖墳墓協会」

イスラームの黄金のドームとアル・アクサ寺院（「ハラム・アッシャリーフ」聖所という意味）が1キロメートル四方の狭い旧市街の中にある。

それらは各宗教の信徒たちが世界中から巡礼に訪れる場所になっている。

イスラエルは、ハラム・アッシャリーフは代々ムスリム管理下にあったので、それ以後もエルサレムのムフティ（イスラーム指導者）が管理することに同意した。

ところが最近ユダヤ教過激派が「神殿の丘」奪還行動が目立つようになり、エレサレムの旧市街地はさらなる紛争の場になっている。

## 8. アメリカはなぜイスラエルに肩入れをするのか

アメリカにとってパレスチナ問題は内政問題だといわれるが、トランプ政権は国際法・国連決議を無視してかつてない親イスラエル政権を押し進めている。

目的は11月の大統領選をにらんで、支持層のキリスト教福音派の歓心を買うことにある。アメリカの福音派はキリスト教徒の4分の1を占めているという。

彼らはキリスト教シオニズムの信奉者。「1948年のイスラエル建国と数百万人のユダヤ人の集結はイエスの復活が間近であるという聖書の予言の実現である」とみている。

就任以来、トランプ大統領の国際秩序破りの一連の行動は、個人的なスタンドプレーなのかそれともアメリカの中東戦略なのか見極める必要がある。

当面の中東戦略は、米軍産複合体は軍事的緊張を必要とし、故意にでも作って儲け先を見つけたという戦略を採っていると考えられる。

## 9. 新しい展開：パレスチナ版フロイド事件

エレサレムで今年5月30日に32歳の自閉症のパレスチナ人イヤド・ハラクさんをイスラエル警官が射殺する事件が発生。警察への抗議のうねりが広がっている。

「警察による暴力」「差別」という点でアメリカミネアポリスのフロイド事件との共通性を見出す声が大きく2つの事件に対する抗議が一体となり、異例のデモが連日続いている。

「パレスチナ人の命は大切」とのメッセージが掲げられた。

SNSで死亡した2人の顔を並べて「2つの国、似た制度」と書かれたイラストが拡散している。（画像参照）

参考文献を多数紹介された。資料にリストあり

NHKスペシャルドキュメンタリー「エレサレム」を見た。

## 質疑応答

- ・キリスト教の基になったユダヤ教、ユダヤ人に対する差別はどこから来たのか

